

令和2年度
学術研究助成成果フォローアップ調査

調査結果報告書

(概要版)

令和3年5月

公益財団法人 ひょうご科学技術協会

調査の概要

1. 調査の目的

協会では、兵庫県における創造的な科学技術の振興を図るため、設立以来27年間にわたり、科学技術に関する学術研究に対する助成を行ってきた。

本調査は、その助成研究が、①どのような研究成果を挙げ、その成果が学界や一般社会等でのような評価を得ているか、②また、助成研究がその後どのような研究に発展し、学術水準の向上や研究者の育成にどのように寄与しているか、③さらには、生活や産業の高度化にいかなる波及効果を及ぼしているか等、研究助成の成果を調査して取りまとめることを通じて、当事業のPRを含めて、学術研究助成事業の今後のあり方等を考究することを目的とする。

2. 調査方法

①目的

調査全体の目的に沿って、助成を受けた研究者にアンケート調査を実施し、成果の実情を把握する。

②調査対象

調査1：助成後2年目 平成30年度に助成を受けた研究

調査2：助成後5年目 平成27年度に助成を受けた研究

調査3：助成後10年目 平成22年度に助成を受けた研究

③アンケート発送日

令和2年9月17日

④アンケート回答期限

令和2年10月23日

⑤アンケート回収状況

アンケート発送数	99件
うち返戻数	10件
差引有効調査数	89件
アンケート回答数	75件（回収率84.2%）

⑥アンケート回答者等の内訳

●調査対象・回答数内訳

	助成研究実施年度	発送数	回答数
調査1	平成30年度（2年目）	35	34
調査2	平成27年度（5年目）	33	22
調査3	平成22年度（10年目）	31	19
合計		99	75

3. 調査項目一覧

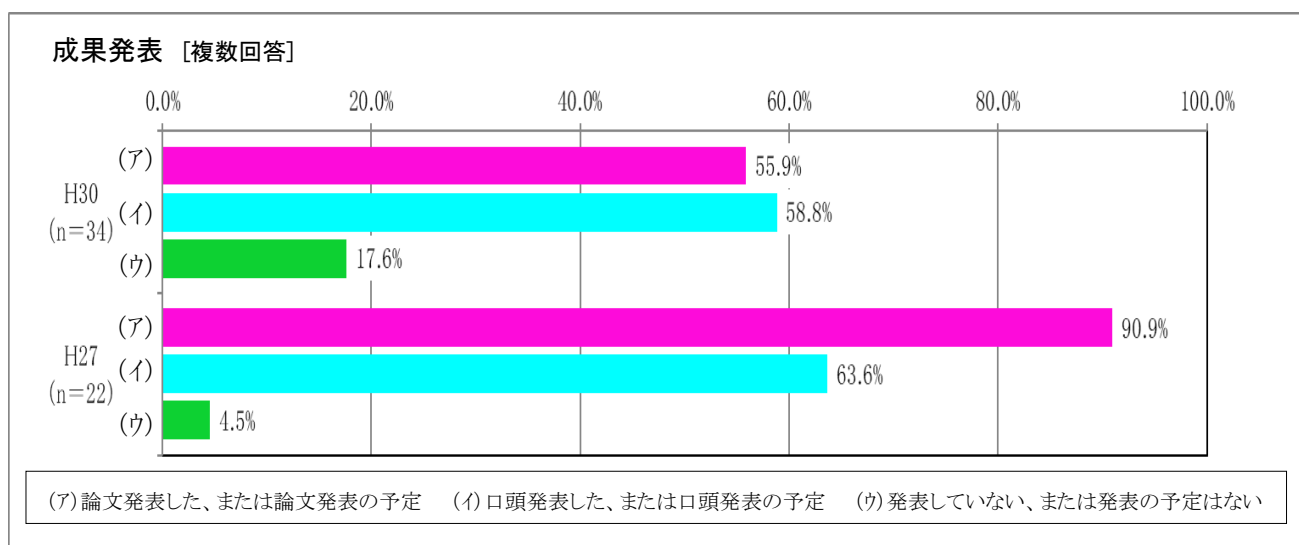
調査項目	調査対象		
	【調査1】 H30	【調査2】 H27	【調査3】 H22
I 「助成対象となった研究」 結果の発表・引用及び反響について 1. 研究結果の発表実績 2. 論文発表件数 3. 口頭発表件数 4. 研究結果の引用実績 (引用論文の調査手段)・・・【調査1】のみ 5. 研究結果の反響や評価	○	○	/
II 波及・発展した(その後の研究) 結果の発表・引用及び反響について 1. 研究結果の発表実績 2. 論文発表件数 3. 口頭発表件数 4. 研究結果の反響や評価	/	○	/
III 「助成対象となった研究」又は「波及・発展した研究」 の成果について 1. 学術面での成果 2. 生活・産業面での波及効果	/	○	/
IV 「助成対象となった研究」のその後について 1. 前回調査以降の反響・成果 2. その後の研究活動における意義・効果	/	/	○
V 当助成制度の意義、問題点について 1. 助成の意義 2. 助成金額の妥当性・・・【調査1】のみ 3. 当助成制度の問題点、改善意見	○	/	/
4. 当調査に対する意見 5. 当協会に対するその他要望		○	○

4. 調査結果概要

I 「助成対象となった研究」 結果の発表・引用及び反響について

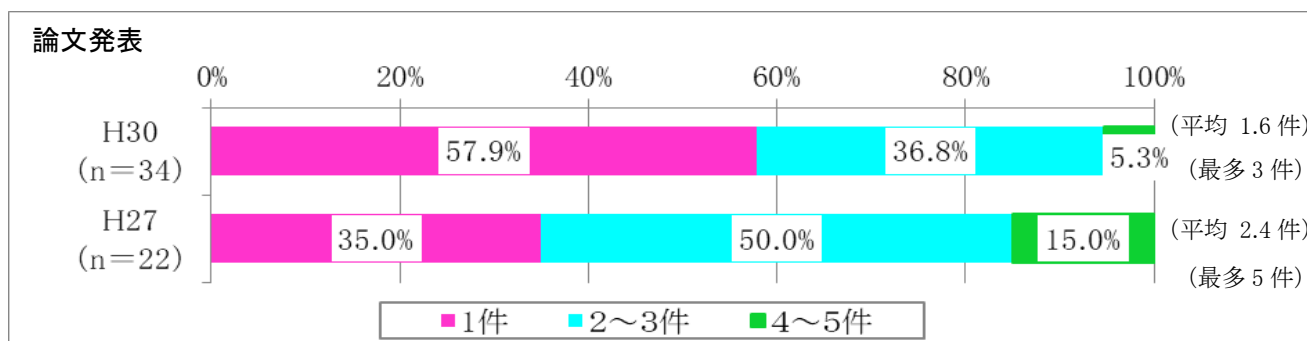
1. 研究成果の発表実績

- 助成を受けた研究者のうち、予定している案件を含めて、論文発表した研究者は「H30」が 55.9%、「H27」が 90.9%、口頭発表した研究者は「H30」が 58.8%、「H27」が 63.6%。
- 論文発表と口頭発表の両方を行った研究者は 42.9%と 4 割を超える。



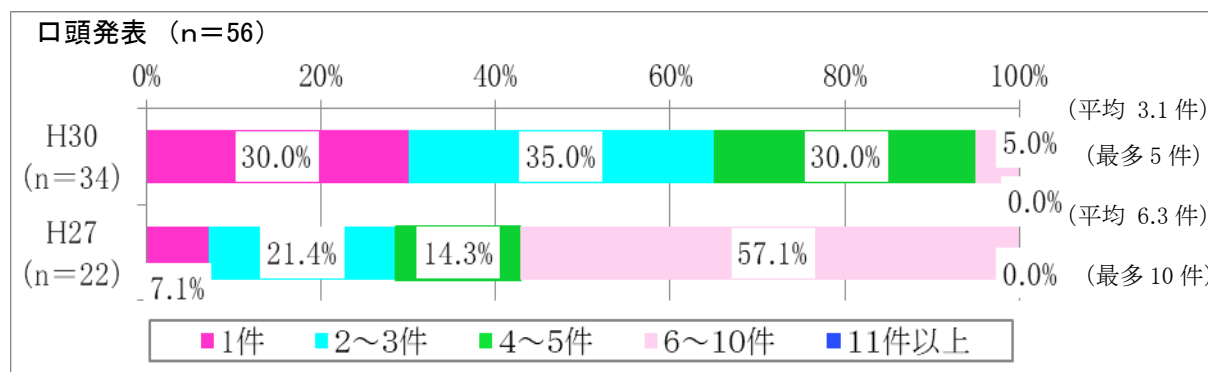
2. 論文発表の実績

- 1 研究当たりの発表件数が 3 件以下の研究者が全体の 8 割を超える (89.8%)。
- 回答者の平均発表件数は 2.0 件、最多は 5 件。
- 助成年度別の平均発表件数は、「H30」が 1.6 件、「H27」が 2.4 件であり、助成年度間で大きな差はない。
- 米国科学アカデミー紀要 (PNAS)、Cell Death & Disease など著名書誌への発表事例があった。



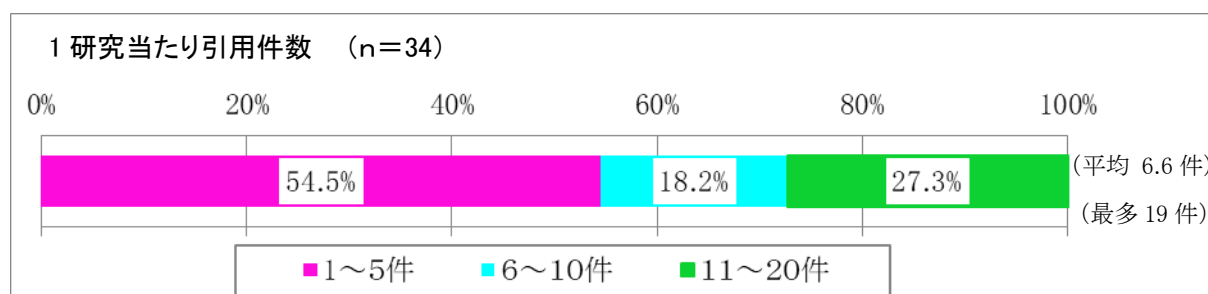
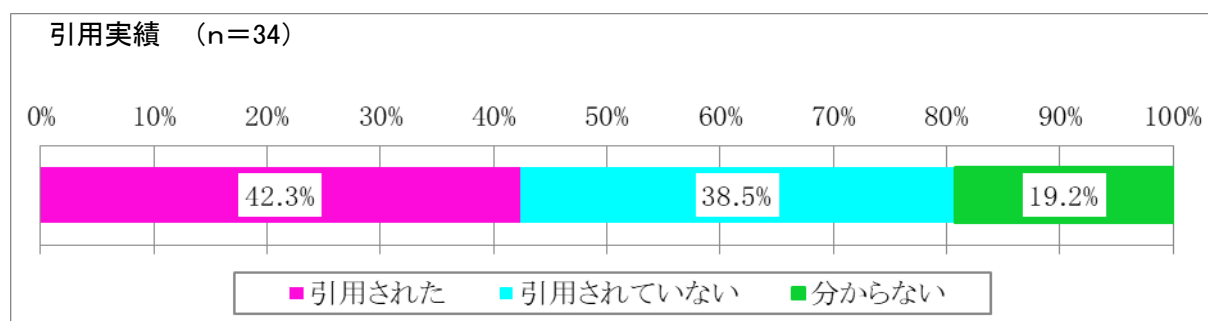
3. 口頭発表の実績

- 1 研究当たりの発表件数が 3 件以下の研究者が 5 割強を占める (50.0%)。
- 回答者の平均発表件数は 4.4 件、最多は 10 件。
- 助成年度別の平均発表件数は、「H30」が 3.1 件、「H27」が 6.3 件。



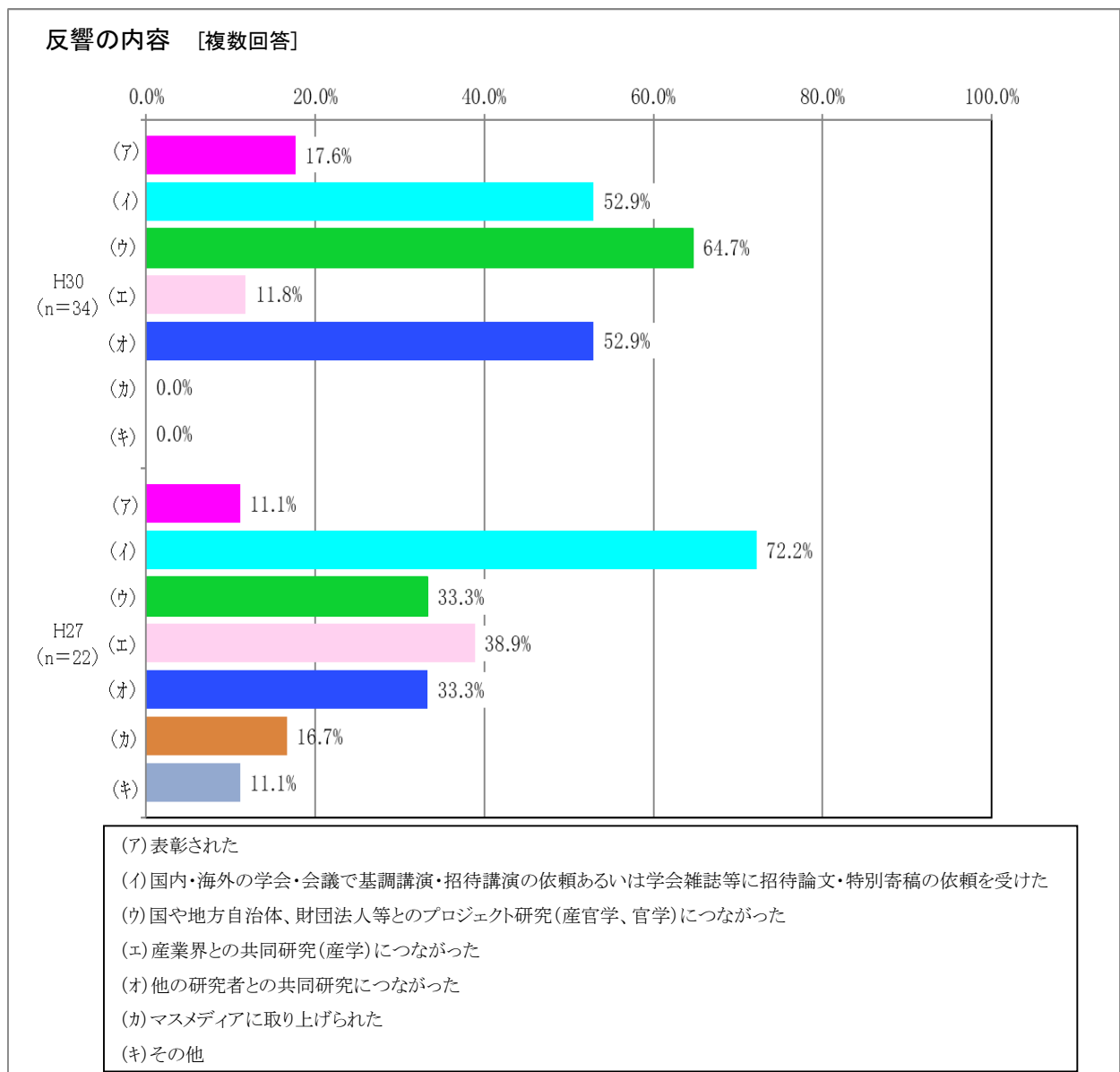
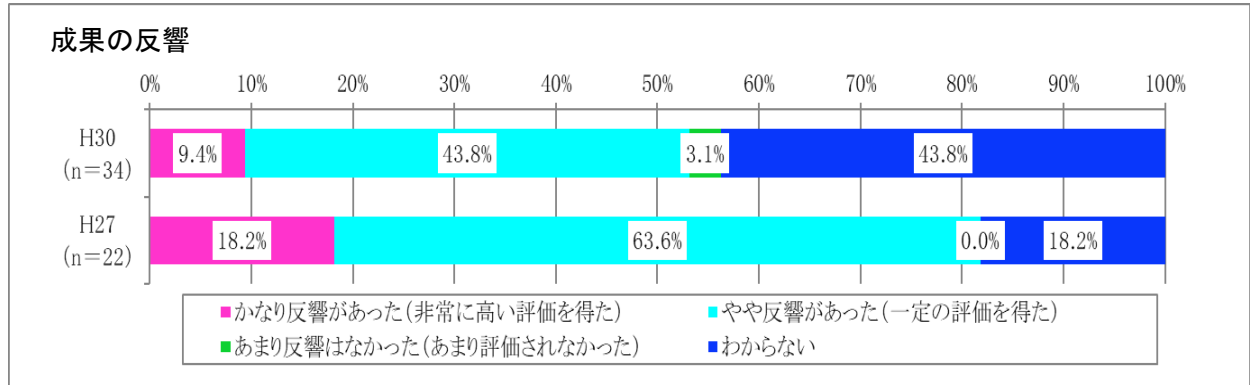
4. 引用の実績(H30のみ)

- 助成研究論文の 4 割が他の学術誌で引用されている (42.3%)。
- 「引用された」研究者の平均引用件数は 6.6 件、最多は 19 件。
- 1 研究当たりの引用件数が 11 件以上は、42.3%。
- NANO ENERGY、Molecular Psychiatry など著名書誌への引用事例があった。
- 引用論文の調査手段は、「Google Scholar」が 54.5%で最も多い。



5. 研究成果の反響や評価

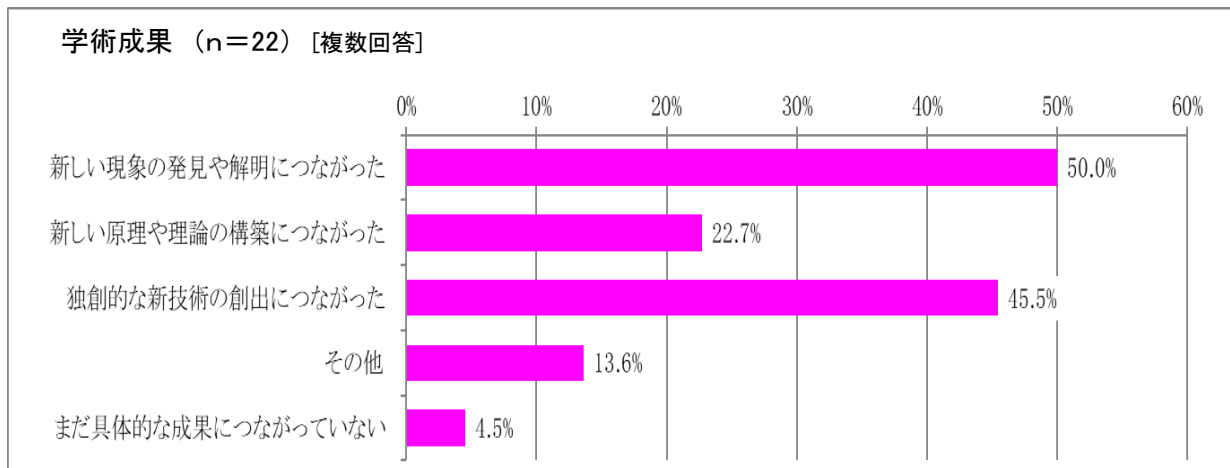
- ・ 反響があったとする研究者は6割を超える（64.9%）。
- ・ 反響があった研究者のうち、「H30」はプロジェクト研究（産官学、官学）につながった研究者が64.7%と最も多く、「H27」は学会等での講演依頼を受けた研究者が72.2%と最も多い。



Ⅱ 「助成対象となった研究」又は「波及・発展した研究」の成果について

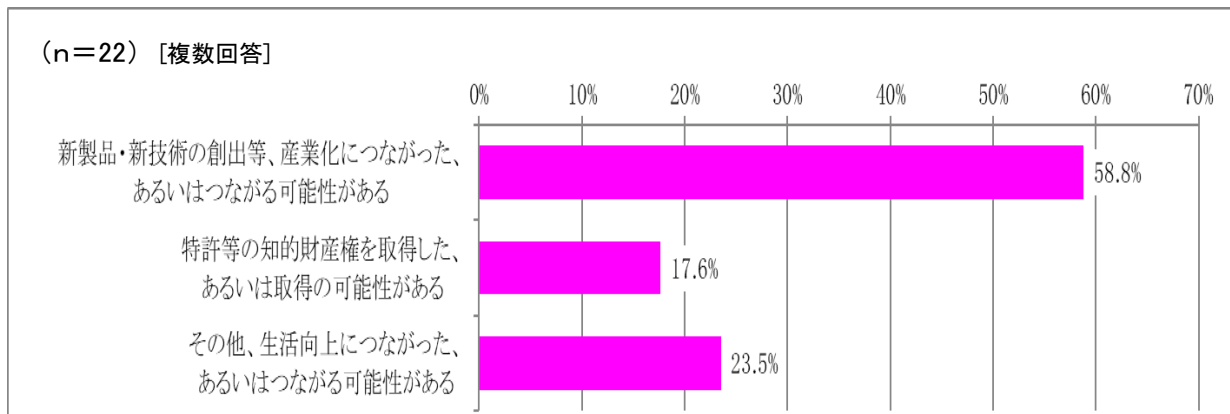
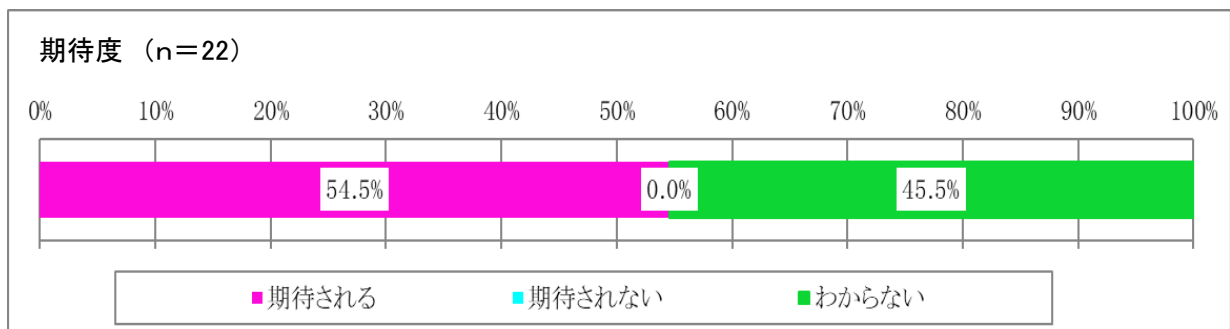
1. 学術面での成果(H27のみ)

- ・ 回答者の9割以上が「何らかの成果があった」としている。
 (「まだ具体的な成果につながっていない」という4.5%を除く95.5%)
- ・ 物質の測定方法・分析方法の開発、反応メカニズムの解明、物質の分離手法の確立など、その後の研究において着実な成果をあげている。



2. 生活・産業面での波及効果(H27のみ)

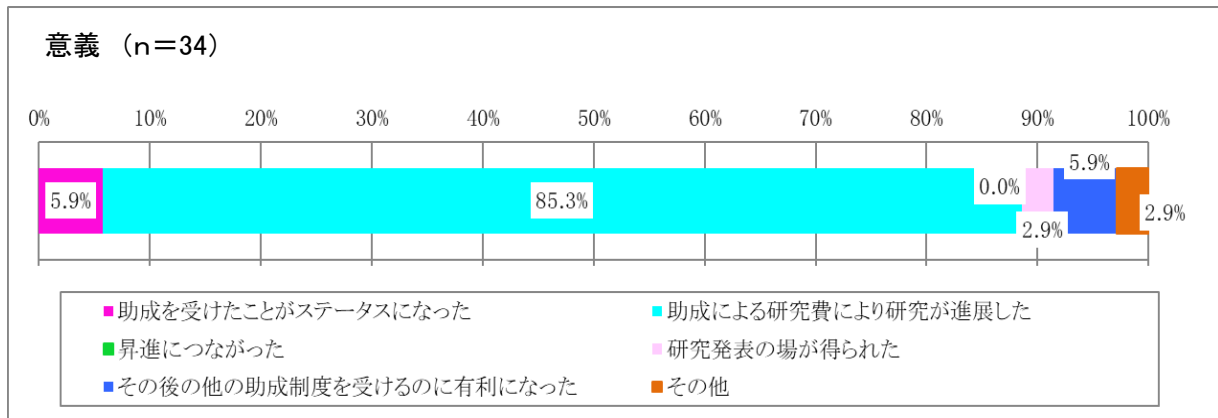
- ・ 半数以上が「期待される」と回答している (54.5%)。
- ・ 特許権を取得した事例を含め、新薬・新治療法の開発、IoT 関連、新物質の生成など、新製品や新技術を生み出す可能性があり、生活・産業面で有用な研究となっている。



Ⅲ 当助成制度の意義、問題点及びその他の要望について

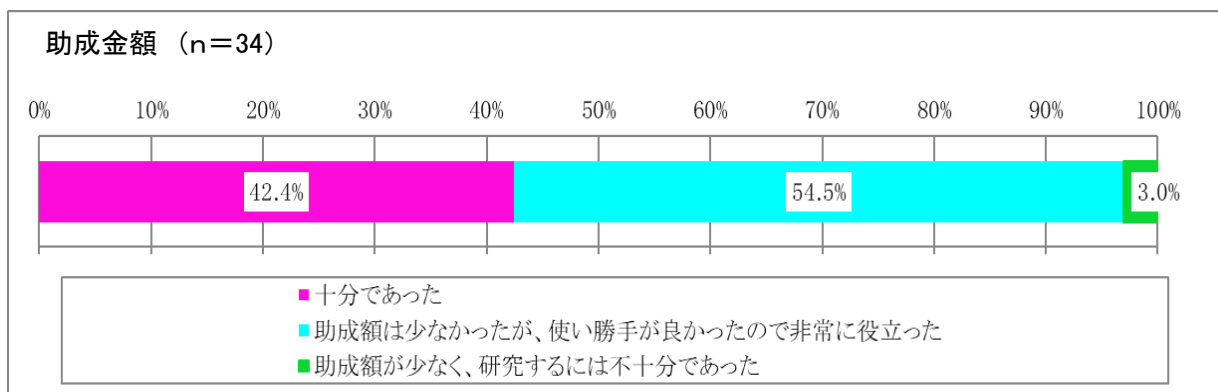
1. 助成の意義 (H30 のみ)

- ・ 回答者の 9 割近くが「助成による研究費により研究が進展した」としている (85.3%)。
- ・ 当助成制度に対する意見・要望においても、当助成の研究費が非常に助かったとの言葉が数多く寄せられており、資金面の援助が研究の進展に大いに役立っていることがわかる。



2. 助成金額の妥当性 (H30 のみ)

- ・ 「十分であった」は 42.4%、「使い勝手がよく役立った」が 54.5%となっており、助成金の有用性を評価する研究者が多い。



3. 当助成制度に対する意見・要望

- ・ 単年度で成果をあげることが難しいことから、助成期間の複数年化を求める意見
- ・ 採択件数および金額の増加に関する要望
- ・ 科研費等との物品の合算購入を可能にしてほしいなど、使途の制限に関する要望
- ・ 実績報告書（会計報告書）の簡素化を希望する意見

4. 協会への要望

- ・ 前掲の当助成制度に対する意見・要望と重複する意見もあったが、協会への謝意を含め、当助成制度の更なる拡充・発展を望む意見が多数寄せられた。